

書 評 論 文

Rice in Malaya
*A Study in Historical Geography**

by R.D. HILL

マレー半島における稲作の
展開とその地域性

高 村 奉 樹**

**Development of Rice-growing and Its Diversity
in the Malay Peninsula**

Tomoki Y. TAKAMURA**

Rice in Malaya aims to relate the historical changes and regional diversity of rice cultivation in the Malay Peninsula to the geographical and socio-economic situation there from prehistoric times to the beginning of the twentieth century. Rice in the prehistoric and early historic cultures of Southeast Asia is described in the first two chapters, which cite archaeological and historical evidence for the age and area of origination of rice cultivation and its spread to the Malay Peninsula. Rice cultivation had become widespread throughout the peninsula by the beginning of the nineteenth century, and chapter 3 illustrates the cycle of operations involved in shifting, semipermanent and permanent cultivation at that time. It also describes land tenure and the gradual changes in the concept of

land as real property in Malayan society.

As a means to understand the diversity of development of rice cultivation, the author proposes that four major regions of rice cultivation emerged between the nineteenth and the early twentieth century. The first is the northern region centered upon Kedah, the colonized lands of Penang and Province Wellesley, and Kelantan, Trengganu. Perak, apart from the tin-mining areas in the south, is also included and offers a fine example of development under British rule. Second, the southern region includes the plain of Malacca, which is largely non-Minangkabau in its techniques, tradition and law, together with the contrasting Minangkabau lands of Negri Sembilan. The third region, which includes southern Perak, the whole of Selangor and Pahang, comprised the 'marches' areas, where rice-growing was of little importance. The fourth region, that of the hill peoples, was only partly known during the nineteenth century.

The remaining chapters focus mainly on the northern and southern centers of rice cultivation,

* 1975. Oxford University Press. 200p. with 20 Tables and 19 Figures.

** 岡山大学農学部 ; Faculty of Agriculture, Okayama University, 1-1-1 Tsushima naka, Okayama 700, Japan

dealing with the traditional or common cultivation methods and their distribution; acreages of paddy fields, with many statistical data on land-ownership and the races engaged in rice-growing; the socio-economic background; and schemes for expansion of rice cultivation, the motives behind them and the fates they met. The discussion on the expansion of cultivated area in relation to the regional pattern of economic development in a colonized area indicates that large-scale development succeeded more often under Malay initiative than British.

Finally, the author proposes a typological scheme which comprehends all the spatial patterns of rice-

growing in the Malay Peninsula. The scheme could be used to classify the ecotypically varied pattern of rice-growing, but difficulty remains in its application to evolutionary development, because multi-ancestral and different types of rice-growing were introduced into the peninsula in different ages and in different areas. On the origin and dispersion of cultivated rice in the Malay Peninsula and adjacent areas, a more detailed and precise theory should be provided by recent studies in this field.

Throughout this volume, the author has successfully combined geographical and historical approaches in depicting rice in Malaya.

ここに紹介する *Rice in Malaya: A Study in Historical Geography* は、先史時代から植民地時代を経て今世紀初めまでの、マレー半島各地域の稲作の変遷の過程を社会・自然環境との関係で明らかにしようとしたものである。著者 R. D. Hill は本書の出版時(1975)にはホンコン大学の地理および地質学科の講師であったが、本書の内容は同氏がかつての勤務地シンガポール大学において行なった研究の成果であり、そこで学位論文として1973年に提出された。先史時代から現代に至るマレー半島の稲作の歴史を地域ごとに論述するにあたって、著者はとくに植民地時代以後についてはマレー各州の刊行物をはじめ未公開の資料を数多く利用しており、参考にした多くの資料は巻末に示されている。各地域の往時の景観や稲栽培の状況を推定するにあたっては、当時の行政官の報告書や、多くの州刊行物の引用によるところが多い。しかし、本書はこのような文献のみによる研究にとどまらず、著者自身によるマレーシアをはじめ内外各地域での現地調査にもとづくものであることは、著者も緒言において述べているとおりである。

全編は9章から成っている。第1章『東南アジア先史時代の稲』と、第2章『歴史時代初期』は、大航海時代前後までのマレー半島

および近隣地域の農耕の発展段階と社会的状況を文献的に明らかにし、この地域における稲作の源流をたどることにあてられている。

第3章『植民地経済の時代まで』では19世紀初めまでのマレー半島について、北部ではケダ、ペラク、南部ではマラッカ、パハンを中心にそれぞれの地域の農耕を主とした生業の状態を考察している。

第4章から第8章では、19世紀初めから20世紀初めの各地域の稲作の展開過程を明らかにするため、在来の稲作様式、各地域の社会・経済、新たな稲作のための入植事業の推移とそれに関与した地域の資本家、行政の動き、灌漑施設の整備や入植者の対応などが示されている。終章の第9章では、以上の各地域および時代を通観して、マレー半島の稲作方式の類型化を試み、その変遷進化の過程について考察を加え、地域の経済発展様式と人口増加、農地の拡張の関連について、歴史地理学的に考察している。

本文200ページ、表20、図19およびマレー語の稲作関連語表、資料・文献目録からなる本書の内容は、大きく分けるとつぎの3つからなるものとみてよい。まず考古学や史学の文献を引用、総括することによって、稲作の起源とマレー半島における伝統的稲作のルーツを明らかにすること、ついで植民地時代におけ

るマレー半島各地域の稲作の実態を、資料・文献によって、社会経済的背景および稲作に従事した人種などとの関連で、歴史地理学的に明らかにすること、最後にマレー半島の稲作様式の歴史的な多様性や地域性にもとづいて、稲作技術の類型化とその変遷進化の図式化を行うことである。

以下、章を追ってその内容の概略を紹介し、とくに稲作の伝播、稲作技術の地域的変異とその類型化など評者の専門にかかわる部分について検討を加えたい。

I

第1章では、マレー半島がフィリピン、ジャワ、スマトラなどとともに東南アジア地域では最古のホアビン文化の圏内にあり、紀元前2500年ごろまでには農耕段階に移行したことを考古学的資料にもとづいて述べている。B. C. 5世紀以後のトンキン地方を中心としたドンソン文化の時代には、ラオス、ビルマと同様にマレー半島を含む東南アジア島嶼部には、特徴のある銅鼓（ドンソン・ドラム）が広域にわたって分布したことから、稲作がこの地域で古くから行なわれた可能性が示唆される。しかし著者は、この銅鼓の分布だけからただちにその地域に水稻作が行われていた証拠とするのは早計であると考えている。アジアの大陸部の農耕の初期段階では、傾斜地の棚田や畑地におけるタロイモ、ミレット類を主とした栽培体系が水稻作よりも先駆的でまた一般的であったように、マレー半島部でも畑作がまず行われ、そこに稲も多くの作物の一種類として受容されていたにすぎず、水稻栽培の歴史は畑作に比べて新しいというのが著者の主張である。

第2章では、マレー半島の稲作の源流をたどり、その北に隣接する大陸部、すなわち、トンキン、アンナンおよびメコン河流域を中

心とするカンボジア、フナン、チャンパそして山岳丘陵地帯、およびシャムについて、稲作の展開状況や社会的変化についての考察が展開されている。主として文献による記述であり、マレー半島部の古い時代の稲作については、そのほとんどを歴史地理学者ホイートリーの文献を引用して、上記各地での稲作技術の系譜との関連を探っている。

つづく第3章では、主として19世紀初頭の前約50年間に出版された、英文による著述を引用することによって、半島各地域の農耕の状況を北部と南部に区分して述べている。この時代までには明らかにマレー半島各地で、稲作が行われるようになっていた。北部では、とくにケダのアロルスター付近が米の生産中心地であった。しかし、南部諸地域では、内陸部では錫の採掘が盛んに行なわれており、マラッカの海岸部では漁業や森林の生産物、ヤシの利用が主であった。内陸部の農耕地では、水稻のほか陸稲や根菜類をふくむ畑作物が栽培された。ペラクはなお未開の森林、沼沢地が多く、錫の生産が主で、米は地域の需要をようやく満たす程度であったという。

以上が、第1章から第3章の概要である。稲作の起源の問題は、著者にとって専門外のことでもあって、文献資料による考古学、歴史的な考察に限られ、とりたてて新しい見解は示されていない。しかし第2章、第3章に述べられた稲作の諸系譜と、マレー半島諸地域にみられた稲作の様式をさらに検討し総合すれば、この地域における稲作様式の伝播についていまだ少し明確な考えが提示されてよいのではないかと考えられる。

著者はホイートリーの記述を引用して、西海岸のケダで稲作が紀元1世紀にまでさかのぼるほど古くから行なわれていたという説には根拠はないが、最近の考古学的調査によると、8-9世紀までには犁を使った農耕が普

及していたことは明らかであり、これをマレー半島および近隣島嶼部における犁利用に関するもっとも古い証拠であると述べている。一方、東北部のトレンガヌ、クランタンでは、古くから掘棒や短い鋤を用いる稲の直播栽培が広くみられたこと、稲は多くの畑作物のひとつの種類とみられる基本的な栽培体系がとられていたことを、著者は多くの報告書を引用して明らかにしている。

こうした一連の記述から、これらの地域の稲作の基本的な系統づけを具体的に試みてみよう。最近の考古学、歴史学の成果を引きつつ、高谷 [1985] は紀元前1000年紀の中ごろから、雲南を頂点として、中国南西部、紅河下流、東北タイにわたる地域に展開した稲作を総括して、ドンソン型稲作と名づけている。このドンソン型稲作では丸い粒形の稲を用い、掘棒、大鎌、踏耕等によって本畑ないしは本田準備を行い、穂摘みをしていたのがその特徴である。著者はドンソン・ドラムの存在だけを根拠に、その地で水稲作がすでに行われていたと判断することは避けるべきだとした。しかし、後章にはトレンガヌ、クランタン地方では、19世紀以後も丘陵地帯の先住民はイモ類、雑穀類を栽培し、一方、河谷部との中間地帯では、掘棒や多数の家畜を用いた踏耕による稲作がひろく行なわれていたことが、多くの報告を引用して示されている。その伝播の時代は明らかではないとしても、ここにみられた稲作は、高谷のいうドンソン型稲作の系譜に属するものと考えられな

いか。またケダについての記載のなかで著者は、この地で用いられた犁がインド犁になったもの、すなわちマレー犁であることは明らかであり、また発掘調査の結果からも、通商貿易を通じてインドの影響を著しく受けた社会の存在が明らかにされているとしている。紀元5-6世紀頃には長粒形の稲を持ち、犁耕、

散播、鎌刈、牛蹄脱穀という一連の技術をもつ、インド型稲作がインドシナ半島のメコン下流平原部を席捲したと考えられている [高谷 1985]。これらのことを総合すれば、ケダではインド型稲作の伝播による犁耕をとまなう農耕が展開されていたといえよう。さらにマレー半島南部での水田の呼称 sawah はジャワ起源の語であることから明らかなように、マジパヒト時代のジャワからの影響も裏づけられており、16世紀までにはミナンカバウ族の移住とともに、スマトラから水稲耕作技術が導入されたことは、著者も述べているとおりでである。

マレー半島の稲と稲作技術は、近代までにすくなくとも以上にしるしたように、その技術内容を異にする主要な系譜の伝播と、その相互の影響のもとに成り立っており、地域性も生じたのであろう。すなわち、もっとも古くは大陸部に起源をもつ畑作が山地や丘陵地帯に導入され、後日そこに陸稲が受け入れられ、低地や海岸部では漁撈やサゴヤシ、バナナの利用や森林の生産物の採集も行われていたが、東北部にまず北方からドンソン型稲作が到来し、ついで西岸部にはインド型稲作が導入され、地域によってはそれらが複合し、または独自に、さらに他の地域に導入された古い歴史がある。その後さらに、ジャワやスマトラからインドネシア経由の稲作が導入されたが、これもまた地域によって原型のまま、あるいは複合しつつ受け継がれ、地域的に技術的な進化がみられたものと考えられる。

II

第4章以下の5つの章では、19世紀初めから今世紀に至る時代について、マレー半島を4つの地域、センターに分け、それぞれの地域における稲作を中心とした農業の発展の状

況が述べられている。

第1の地域は北部の稲作の中心地である。まずケダ、ペルリスをはじめ、当時まだ繁栄していたクランタン、都会的で工業的技術を有しながら、社会、経済的に混乱していたトレンガヌ（第4章）、植民地化の影響の強く現れたペナン、プロヴィンス・ウェルズレー—現ペナン州—（第5章）、また英国の統治下で水田開発が進められたペラク北部（第6章）を含んでいる。

ケダは17世紀のアチェ王国による支配、19世紀前半までのたび重なるシャムとの攻防など動乱の時代を経験したが、1880年代には地元の貴族階級による水田入植事業の着手がクランタンからの農民の流入とあいまって、かつてのコショウ生産地をアロルスターを中心とする米の生産地に変容させた。これには英国に領有されたペナンへの米の供給の必要性が大きな刺激となった。

著者が第2の地域としたのは、マラッカ平野部を中心に近辺のヌグリスンビランおよびマラッカ北部のナニン地区のミナンカバウ族の居住域を含むが、技術、伝統および法制のすべてにおいては在来マレー人の地域である（第7章）。ついで第3の地域はペラク南部地域、セラングールおよびパハンなど、山岳・森林地帯と定着的な水田地帯の中間に存在するいわば境界的な地帯である。マレー人によって稲作が行われていたが、これらの地域はまた錫の産地でもあって、錫採鉱と水稻栽培の利害関係の対立がしばしば生じ、鉱滓による被害を防ぐため、採鉱が禁止された場合もあった。

著者が第4の地域としたのは、マレー人社会にとってはその辺境、先住民の居住する地域である。ペラク、セラングール、パハンなど広域にわたり、高度約2,000フィートまでの丘陵地で焼畑耕作を行う地帯である。作物としては、比較的新しく導入されたキャッサ

バを含む各種の根菜類、バナナ、トウモロコシ、ハトムギ、それに稲が栽培された。ただし、稲は必ずしも主要な作物ではなく、場所によっては19世紀半ばにマレー人によって、はじめて先住民に紹介されたとする報告もある。なお、海岸部に住む先住民は米の栽培は行わず、わずかながら根菜類を栽培し、バナナをもっとも多く利用した（第8章）。

この時代の記述は対象とする時期を必ずしも統一し得てないのは著者も自ら認めるところである。英国による諸州の統治権の獲得の時期の相違にもとづく記録や資料の存否が原因である。

さて以上の地域区分は、稲作の歴史地理学的な地域区分としてはたして適当であろうか。第1の地域は、稲作展開の歴史的背景を異にし、とくに植民地時代の到来による社会的状況も異なるマレー半島北部の東西地域をすべて包括している。在来のマレー稲作の系譜を重視するならば、この第1の地域についてはさらに検討の余地がある。

ここで著者のいう第1の地域について、簡単に内容の紹介を行なっておこう。ケダ地区の本来の中心地はケダ南部にあり、ケダ北部は18世紀末までマングローブや湿地林によって占められていたがこの時期に、ワンマッサマンによるアロルスター・ケダ山運河をはじめ、多くの運河の掘削が行われ、稲作のための入植がはじめられた。しかし運河相互の連絡は完全でなく、また灌漑排水路としての機能も、期待したほどではなかったという。だがこのような事業は、土地のもつ財産としての価値をあらためて認識させる契機となった。著者はケダ河周辺やケダ水路沿いの水稻作地帯の詳細な地図を作成し、また1911年におけるこの地域の人種別稲作従事者の全勤労者にしめる割合を調査した結果、稲作従事者としての数も全勤労者中の割合も圧倒的にマレー人が多く、また大きいことを明らかにし

た。

ペナンでは、小規模ながら稲作を含む集約的な土地利用が進行した。そこでは消費地としての性格が強いことを裏づけるため、1807年～61年にわたる米の価格の推移が、表および図によって示されている。

プロヴィンス・ウェルズレーでは、肥沃な土壌と地形的有利さがあいまって、道路整備を含む入植事業が積極的に進められた。この地域については、水田と畑の地理的分類、耕地中の水田割合をはじめ、人種、階層別の農地所有規模と利用状況、地域別稲専業農民の戸数や耕作規模が示されている。1830年ごろのウェルズレーでは、北部のムダ河周辺では水田の占める割合が大きく、南部のジュル河以南では畑地が多かったが、マレー系農民は非マレー系農民に比べて水稻作を選ぶ割合が、やや多かったことが示されている。

ペラクでは、ペラク河流域やセラマ河流域、およびスリム地区が農業の中心地であった。地域別の稲栽培面積と人口、耕地と可耕地面積、入植地を含む稲作が行われていた地点、入植状況、米の輸出、輸入量などが多くの図表によって示されている。

クリアン、ラルトでは、1870年代に英国統治下において、ヨーロッパ人による稲作経営が行われており、ラルトにおける錫採掘の進展が、周辺部に稲作地を増すきっかけとなり、またペナンからの稲の出作り耕作も盛んであった。立地条件としては排水が悪く、気候条件によって稲の作季も限定されていたため二期作化の試みも成功をみず、小作人の定住性が悪く、事実上事業は失敗している。以上の新しい入植地に適用された稲作技術については、たとえば上記クリアンの新しい入植地では、植付け棒 (tajak) を用いた稲作が行われたという記載がみられるほかには明確な記述はない。

東部のクランタンでは天災などによる被害

が重なったが、20世紀に入った直後の状況は、河谷の下流部やデルタ地帯で天水田、灌漑水田での水稻の移植栽培が、上流部では3年に1回作付けの天水田での直播栽培が一般的であったという。休閑中の水田跡地では、多くの牛や山羊が放牧され、その中には下流部での農耕に使役された家畜も含まれていた。トレンガヌでも同様に天水田を含む水田が利用され、家畜飼養も盛んであった。

つぎに第2の地域のうちマラッカ平野部については、19世紀初頭までは米の自給が可能であったが、地域の米の平均収量はエーカーあたり約290ガンタンであったという。当時のウェルズレーにおける平均収量、エーカーあたり350ガンタンに比べると約80%に相当する。北部に比較して硬い粘土質土壌で、その肥沃性が劣っていたことが低収の原因であったという。また1890年ごろには米の自給が年間の3カ月分相当に低下してしまっていたが、これは自然環境、技術の問題ではなく、十分の一税のとりたて、地主階層の無力など、法令や社会的な問題が大きく関わっていたとしている。小作人 (rakyat) は作物の収穫量を一方的に査定され、かつ物納でなく金納を強制されたため、小作料支払いを拒否し、内乱にまで至って農地は荒廃した。

他方、山間河谷部のミナンカバウ族の農地では灌漑によって水稻が栽培され、またほかに陸稲、トウモロコシ、コショウなどの作物も複合栽培下に置かれていた。ミナンカバウ族についてはマラッカ、ヌグリスンビラン地域の彼らの居住域や、1870年～1910年の稲作地の面積、そしてマラッカ、ナニン地域の19世紀以降の稲作地域やミナンカバウの人口などが図表で示されている。彼らの地域では農地の所有面積は小さく、作物複合を維持しつつ稲作への執着も著しく強かったというが、農業生産の商業化はみとめられなかった。これに対して、マラッカ平野部の在来マレー人

の入植地では上記のように一般に農業の発達は期待できない状態ではあったが、地域によっては野菜などの市場むけ生産の専門化、商業化が部分的に進行し、商業的生産の段階に入っていた。

以上の各章では、1830年ごろから今世紀初めまでの各地域の稲作の展開、推移が多くの資料をもとに、その地域ごとの自然や社会条件との関連で詳細に示されている。なかでも第1の地域については、多くのページがさかかれており、19世紀から20世紀初めにかけての水稻栽培を目的とした耕地の拡張および入植事業の成果を、その規模と事業の主体別に比較検討している。著者はケダやペルリスにみられた、主としてマレー人主導型の大規模な開発が成功をおさめたのは、計画自体が推進者の公共的立場と個人の利益追求の点で一致していたこと、また地域における彼らの社会的地位が高かったことが大きく関与したという点を指摘している。一方、英国人主導型の大規模な開発事業はクリアンに名をとどめてはいるが一般に成功を収めることはできず、またペラクやセランゴールにおけるインド人、中国人を対象とした入植事業も成功に至らなかった。クリアンにおける成功がマレー人の稲作農民を移住させ、自営的農民を作り出すことによって初めてもたらされたことと対照的である。

著者が多くのページを割いて明らかにしようとしたのは実はこれらの事実であり、そのことを通じてマレー人の農耕社会の特性を提示することであったのではないかと思われる。ここに示された多くの事例を通じて著者は、外部に開かれたマラッカ社会発展の契機ともなった近代的産業部門の錫鉱山事業がおおむね外来の移民を用いることによって成立し、一方マレー人は伝統的産業部門にとどまり、水稻耕作を担うことになった、その歴史的な過程を鮮明に描き出しているのである。

ところでこれらの入植事業の成否について、著者はその失敗した場合の原因を、雇用や税金など社会的要因とともに、入植地における灌漑排水路などの設計施工上の不備、つまり技術のレベルの低さにもよるところが大きいとしている。しかし、上記のクリアンの入植地などにおける稲の収量性の低さは、灌漑技術の低さのみにその原因を帰してよいものであろうか。マレー半島の稲作を規制した自然条件の関与については、土地環境と稲の生産力についての最近の総合的研究の成果によって、再考してみることも必要であろう。マレー半島の西岸は主に海成沖積土、腐植質グライ化土壌、泥炭土などによって縁どられている。もしこれらが汽水条件の沼沢地や浅いらグーンの状態にある場合、それを干陸することによって、土壌は強い硫酸酸性をしめすに至る〔古川 1976：379〕。入植地はその立地条件からみて、一般にこのような条件のところに設けられる機会が多かったことであろう。これらの土地では、入植後短日月のうちに稲作によって安定した収量を得ることは困難で、農民のうちから多くの脱落者がでることも容易に想像できる。こうしたことが、社会的要因とともに入植の成否に関わったであろう。土壌や自然の立地条件に対する、個人的とみるよりは社会的な総合的農耕技術の未成熟さにも、注目することが必要かと思われる。事実、東海岸部では湿地帯での移動耕作があったが、こうした酸性湿地における稲作も不安定であったことは想像にかたくない。また、その地域では多くは食料として主としてサゴヤシに依存し、生業としては漁業、ヤシの葉を編んだ建材「アタップ」の生産に依存した。稲作の不成功によって住民達は、サゴヤシ澱粉によって生きのびたという記載もみられるが、実は食物としての米への依存の基本的姿勢というのは著者が考えているよりも柔軟性に富んでおり、サゴヤシのみ

ならずバナナや多くの種類の根菜類は、かれらにとって本来米以上に親しみのある食品であった。「マレー半島の大部分では水稻耕作は恵まれた自然条件を念入りにコントロールして、その手法をみがきあげてきたというよりは、完全なコントロールの不可能な条件を前提として成立してきた」という『マレー農村の研究』のプロローグの一節〔口羽ほか1976:4〕は、入植事業の成否にも関わりのある、この地域の自然的・社会的状況を端的に表しているといえよう。

III

終章では、著者は各地域の稲作の推移を総括し、稲作の類型化を試みることによってマレー半島における稲作様式の進化過程を明らかにしようと試みている。

著者は稲作様式の類型化にさいして、もっとも古く導入された技術としては焼畑が基本であるとしたうえで、稲作については複数の原型を想定し、また稲作技術の進化は一方的な段階としてとらえるのではなく、停滞、ときには逆行を伴う過程として考えることを前提とした。その結果、原型としてまず、A: 2~3年周期の作付けと休耕による稲を含む畑作を考え、その上で、B: 短期耕作, C: 半永久的耕作, そして、D: 通年作付けされる永久耕作, に区分する。ここでBをさらに、傾斜地による焼畑と平地・湿地における藪地耕作にわけ、技術的なバリエーションとして掘棒使用の有無と散播・穴播の別を考慮する。またCは2~3年周期の作付けと休耕によって、稲を主な作物として栽培する湿地耕作、同様に1~2年周期の平地耕作、平坦地における3~5年を周期とする作付けと草生休耕に区分した。この場合も付随的な変異として掘棒、踏耕、鋤耕または犁の利用や畦畔の存否、直播であるか移植であるかを考慮

する。最後のD通年の永久耕作になると、移植による栽培が普通になる。この段階では畦畔の存否、灌漑方式、他の作目との輪作の様式が変異として考慮される。このようにして著者は、稲作の粗放で初源的な作付体系から徐々に集約的な耕作体系へとむかう過程を、ボズラップの示した森林または藪地休耕から短期休耕へ、さらに永久耕作へという発展過程〔ボズラップ1965〕に、それぞれ対応させ、その過程の移行を可能にした技術的進化について考察している。

著者はすでにマラヤにおける稲作の技術体系についての類型化を行い、Wet rice, Dry riceがマラヤでは移植稲、直播稲に相当するとしたうえ、更にそれぞれを天水田・灌漑水田、永久耕作・休閑耕作にわけた〔Hill 1966〕。本書ではそれをさらに検討して、稲作の技術進化の問題を論じようというわけである。

ボズラップが行なった土地利用システムの分類の目的とするところは、人口成長と農業発展の関係を検討するために、土地利用の集約度をまず休閑期の長短を指標として区分することにあつた。粗放から集約へとむかう過程では、根菜類から穀物類への変化、またそれに伴う農業従事者ひとりの時間当たり生産高の低下が想定されている。

ところで本書で著者が試みている稲作を主体にした作付方式の類型化では、BからDにむかって全体としては、休閑期間の短縮の方向を示してはいる。ところが、A東南アジアにおける祖型とされているものは短期休耕であるのに対して、Bは森林または藪地休耕であつて、AからBへむかうという発展過程は、休閑期間の長短を尺度にすれば明らかに逆行する過程である。またCの半永久的耕作では、1~3の序列は湿地、平地およびゆるやかな起伏地の順に配列されており、ここでの分類の基準は一応休閑期間の長短におかれているが、あとの区分には作付立地、移植、直

播の別、耕起の方法などがすべて列記されているにすぎない。結論から言えば、マレー半島部における稲作がすでに述べたように、起源を異にする複数の系譜の複合によって成立していることを考慮すれば、ここでは単一の進化モデルを設定することは不可能なのであろう。しかしそれぞれの立地条件や時代に応じて地域によって多様な稲作方式が、その相互間に技術的要素の授受を伴いつつ、重層的に展開したマレー半島部における稲作の生態型 (ecotype) が、ここに整理されたのであるから、これらの生態型を用いて、さらに各地域の稲作技術の進化の特徴が明確にされることがのぞまれる。

なお著者は休耕期間の短期化、および半永久耕作における草生休耕への移行の契機と、その過程で生じたとみられる耕作様式の変化についての考察を加えている。とくにあとの問題については、ボズラップがこの段階に進むためには、犁の使用が必要であると述べているのに対する論議である。著者は例として、パハンでの草地休耕作では確かにマレー犁 (tenggala) が用いられていたが、この地域では雑草の種類が、地下・地上茎の発達が旺盛なものでなかったから、必ずしも犁耕は不可欠ではなかったと考えている。また、土を掘りおこす小鋤 (changkol) が使用されたという観察資料も全くないという。とすれば、各地でその段階への移行を可能にした技術は何であったのか。著者はこの点に関して明らかな答えは示していない。しかし草地休耕システムの起源のひとつの可能性として、湿地耕作の技術の平地やゆるやかな斜面での耕作への適用を挙げている。以下に、このことに関連して少し述べておきたい。

19世紀のマレー半島各地域で、水牛による踏耕 (lanyak) が広く行われていたことは、著者もすでに示しているとおりでである。ペラク河流域の数年間の放牧を伴う水田作と、

その内陸部における湿地や丘陵での直播短期耕作、クランタン、トレンガヌなどの3年に1回の休耕を伴う天水田での直播栽培、パハンの湿地において乾燥したところを利用して苗床とし、踏耕によって準備した本田での移植栽培法などである。勿論これらの地域では、犁が利用される場合もあった。

一般に熱帯降雨林の川沿いや、沿岸低湿地の焼畑稲作では、耕地の均平作業は行われず、穴播または穴植栽培が行われる。次に畦をめぐらせ水深を制御し、毎年水稻を栽培する段階に進むにつれ土壌の乾燥・固化が生じ、代かき・草の踏みこみを同時に行うことが必要となり、踏耕が行われる。即ち、耨耕湿地稲作が連年作付へと進化する過程において、踏耕が始まったとみられ [田中; 古川 1982: 37]、また踏耕散播は、植付棒移植とともに通年湿性の海岸部にあった技法で、かつてマレー世界に広くみられたという [高谷 1982]。これらのことを考えあわせると、湿地耕作技術の一般平地、緩斜面での適用を可能にし、草地休耕システムの展開を可能にした技術的要因は、家畜による踏耕ではなかったかと考えられる。また耕地の地形が制限条件とならない場合には地域によってはマレー犁が用いられ、地域、時代によっては、踏耕に用いるための多数の家畜飼養の可否も犁耕への転換のきっかけとなったと考えられる。

なお著者は家畜の利用と飼養の状況についてとりわけ注目し、その放牧形態への関心を示しているが、これはヨーロッパ等におけるような輪作システムとの類似性をそこにみようとしたのであろうか。

最後に著者は各地域における農業発展の特徴を、とくに商業化が進みつつあった近隣各都市との関係でとらえてその地域性について述べている。すなわち、農業が商業化して行く過程において、それが集約化の方向にむかったかまたは稲作耕地の拡大へとむかったか

について、可耕地の存否との関連において単純化したモデルをつくり、それを各地域にあてはめ整理している。その結果、北西部のケダ、ペルリスの平野部で農地開発とともにある程度の集約的技術を伴った栽培が発展を遂げたことが明示されている。その原動力となったのはその地域の土着の企業家たちの商業的営為と土地を得ることへの意欲によるところが大きいとしている。

この地域を含むアジアの稲と稲作の歴史についての最近の研究成果は著しいものがある[渡部 1983 a; 1983 b]。また、マレー半島においては米の自給率の向上がなお必要とされ、水稻作は現在も多くの課題を抱えている。この時期にあたって、マレー半島に視点を定めた稲作史が出版されたことは高く評価されるとともに、新しい研究段階へのさきがけとしての意義も大きいといえよう。しかし、さいごに評者としては、今後さらにアジア人による土着的な視点からのマレー半島の稲作の現状と歴史が書かれることを期待したい。

参 考 文 献

- ボズラップ. 1965. 『農業成長の諸条件』安澤秀一; 安澤みね (訳). 京都: ミネルヴァ書房.
- 福井捷朗. 1980. 「火耕水耨の論議によせて」『農耕の技術』3: 28-61.
- 古川久雄. 1976. 「第4部A 土地環境」『マレー農村の研究』口羽益生ほか (編), 375-391ページ所収. 東京: 創文社.
- Hill, R. D. 1966. Rice Cultivation System in Malaya. *World Crops*, Sept: 72-74.
- 口羽益生ほか (編). 1976. 『マレー農村の研究』東京: 創文社.
- 高谷好一. 1982. 『熱帯デルタの農業発展』東京: 創文社.
- . 1985. 『東南アジアにおける自然と土地利用』東京: 勁草書房.
- 田中耕司; 古川久雄. 1982. 「踏耕の系譜」『南西諸島農耕における南方的要素』文部省科学研究費報告書 (代表者 渡部忠世).
- 渡部忠世. 1983 a. 『アジア稲作の系譜』東京: 法政大学出版局.
- . 1983 b. 『IV. 稲作の起源と展開——アジア大陸と日本——』『日本農耕文化の源流』佐々木高明 (編), 163-194 ページ所収. 東京: 日本放送出版協会.